

プロローグ(3月28日より4月2日まで)

ブリギッテとフランク(副団長)夫妻とぼくはベルリンからオデッセイ飛行をして3月28日に成田に到着。翌日29日に新幹線などを乗り継いで四国に入る。元の坂東収容所などを見学する。翌日の30日と31日に鶴さんと廣瀬さんとKさん(3人とも中学時代の同級生)と6人で二日間お遍路さんをする。

31日の午後に四国を出て姫路に向かう。中学時代の同級生、H君の作用町にある新宅を訪問する。そこには中学時代の同級生のTsさん、Tさん、Yさん、それにMが来ていた。それと大阪から1月にベルリンで知り合ったばかりのKさん(映画監督)も到着。8時前になり大宴会が始まる。地元のYさん(料理屋の女将さん)が料理を取り仕切っている。山海の珍味を鍋に入れて、食べまくったと言いたいが、歳なので1時間もしない内にもう食べられないと悲鳴を上げる始末だった。男性群は作用町のゴルフ場にあるホテルに泊まる。

翌日の4月1日は智頭町の有名な石谷家の大邸宅、さらに節句人形を見物する。午後には Tsさん、Tさん、Yさん、Kさんの4人は関東に帰る。午後遅くからH邸の庭で少し寒かったがバーベキューをする。ぼくは得意な火付け役をする。味の方はプロのYさんが面倒見る。またたらふく食べた。作用町のゴルフ場にあるホテルに泊まる。

4月2日は快晴そのもの。H邸の前にそびえる利神城跡に登攀する。登り口を間違えて、山をいくつか越えてやっと城跡に達する。下を見下ろすと遠入邸がよく見えた。庭を歩いている人間まで認識できた。午後に作用町を出発し、姫路から新幹線で千葉県市川に帰る。ぼくは船橋の姉の家に。

### ボランティア活動日記

4月3日(火)

8時半に東京駅の22番線ホームに集合予定。8時20分頃に到着するとブリギッテとフランクが鶴さんとすでにホームで待っている。少し離れたところでヨハンナ(元医療技術師、年金者)とルッツ(ベルリン警察の鑑識課勤務)が立っているのを見る。さらにアクセル(建築家)も見つかる。山梨在住の建築家のヨルク・ゲーチャーがホームを歩いてくる。東京で日本語勉強中の木下ジュン君も来る。残りは名古屋から参加の村瀬さんだけだ。携帯に電話すると、すでに東京駅に到着していて指定席を取っているのだからホームの他の場所にいるとの事。全員集合できて、ほっとする。前日に到着したヨハンナとルッツに昨日なぜ僕の携帯に電話しなかったのかと聞くと、何度もしたそう。一回だけ鳴ったのが聞こえたが、不思議なこともあるものだ。「こまち19号の7号車」に乗り込む。全席指定だという。指定席券を買っている時間がないので、とりあえず乗り込み、勝手に空いている席に座る。発車のベルが鳴り、8時56分定刻通りに列車が動き始めたので、一安心。いつものこ

とだが、やはり日本の電車はドイツと違うと感心する。しばらくして通りかかった車掌さんに、空いている席を聞くと、隣の6号車に空席があるとの事。やはり指定席のあるジュン君を除いて荷物ごと移動する。車内ではグーチョーと35年ぶりの再会を喜ぶ。みんな気分が高揚している感じ。グループとして悪くない。仙台に着き、新花巻行きの別の新幹線に乗り換える。東京駅に15分早く来て、初めからこの新幹線に乗れば、乗り換えの必要がなかったのだが。団長として失格だ。名古屋から参加のフランクのMixi友だちの村瀬さんも一緒になる。しばらくしてジュン君が乗っていないのに気づく。携帯に電話すると、繋がらない。その代わりに、SMSが来て、仙台で切符を買いに降りて、我々の新幹線に乗り遅れた、一電車遅れて来るとの事。

新花巻駅に到着。大分寒くなってくる。釜石線に乗り換える。なだらかな丘陵地帯が続く。典型的な里山風景だ。初来日のルッツとアクセルに里山を説明する。天気は雨模様。風も強まってくる。12時45分に遠野駅に着く。小雨がぱらついている。3台のタクシーで浄化センター内にある「遠野まごころネット」に乗り付ける。去年の大きな体育館と違って、プレハブの平屋だ。荷物を持って、大広間に入る。「絆・ベルリン」の受付登録を済ませる。受付は中年の女性で、前回の若い女性よりずっと親切だ。名古屋から参加の中年夫妻と一緒にセンター内での規則などについて説明を受ける。参加申し込み書に記入し、規則を守るという誓約書に全員にサインさせる。大広間に連れて行かれ、入り口にあるホワイトボードへの記入について説明を受ける。48の升目があり、そこに寝る場所の畳の番号と壁際にある荷物の置き場所の番号、さらに滞在期間を記入する。空いている畳が少ないが、全員の寝る場所を確保する。みんなで長靴や寝袋のマットなどを買いに近くのホームセンターまで歩く。小雨がぱらつき、風が強いので、歩き辛い。その後となりのスーパーにも行き、夕飯と翌朝の朝ご飯を買い込む。ジュン君から電話がかかり、遠野駅に着いたとの事。タクシーに乗るように言う。僕だけ先に帰ると、浄化センターの入り口で彼が待っていた。途中で降りる必要などなかったのにといい、新幹線に乗ったのが初めてで、知らなかったとの事。建物内に案内し、買って来た食糧を分けてあげる。午後に別の電車で到着する予定の亜未とガブリエルから電話がある。花巻駅に来ているが、強風のため電車が走らないそうだ。夕方には走るかもしれないので、まずは待つとの事。しばらくして今日成田に着いたより子さんから電話で、新花巻駅から電車が動かないそうだ。お互いに捜し合い、3人でタクシーで来るように言う。しばらくしてまた電話があり、互いに見つからないという。よく考えてみたら、別の駅で待っているのに気づく。とにかくタクシーでも何でも今日中に到着するように指示する。

夕方の6時にはぼくとヨルクとフランクは「遠野まごころネット」から夕食に招かれる。駅近くのレストランにプロジェクト・マネージャーの及川さんと理事の荒川さん、さらに事務長の遠藤さんの6人で赴く。明日開催される上長部コミュニティー・センター(公民館に替わって。以下上長部CC)の地鎮祭についての打ち合わせをする。途中から多田理事長も駆けつけてくる。食事を終えてセンターに戻るとちょうど3人がなんとか到着する。まずは一安心。ところが男子部屋は一杯でガブリエルは近くの公民館に泊まる事になる。風は強くなるばかりだ。9時半頃に寝る準備をして、寝袋に入る。廻りを見てみるといくつか畳が空いているじゃないか。ガブリエルも泊まれたのに。10時に消灯

になり、まずは横になる。となりに7, 8歳の子供が一人で横になる。まわりでいびき交響楽団が演奏し始める。さらに風の音がひどく、天井が飛ぶのではないかと心配する。うつらうつらしているうちに6時の起床の音がする。さっそく起きて、外を見ると雪でまっ白。

4月4日(水)

これでは今日の地鎮祭もお流れだろうとがっかりする。みんなも起きてくる。何人かの「絆・ベルリン」メンバーが集まってきて、部屋の真ん中におかれた石油ストーブを囲んで車座になって朝ご飯を食べ始める。彼らはこれでは今日の作業は取りやめだと半分喜んでいる。8時過ぎにまごころネットの及川さんに電話して、地鎮祭が取りやめかと確認すると、いや陸前高田市の方は雪が降っていないという。だから、予定通り行きますとも。そこで12人全員が参加できるようにバスを手配してくれるように頼む。午後の1時からの行事開始から逆算して10時半頃出発するとの事。途中東北新幹線の北上駅でベルリン独日協会副会長の竹谷さん夫妻およびドイツ大使館のアイルリッチ参事官をピックアップするために少し早めに出る。11時過ぎに駅に着く。ところが強風のため、新幹線が仙台駅でストップしていて来ない。12時過ぎになり、一関駅までは来るとの連絡が入り、バスで迎えに走る。1時頃になってやっと新幹線が到着する。竹谷さんご夫妻が改札口から出てくるが、アイルリッチ参事官らしき人はいない。翌朝早くアポがあり、今晚東京に帰れないんじゃないかと心配し、仙台から戻ってしまったのだそうだ。2時過ぎにやっと地鎮祭会場のある上長部に到着する。

いやはや寒かった。廻りに建物のない原っぱで吹き下ろしの寒風がま正面から吹きつけてくる。来賓という事で最前列に座らされた。バスの出発が慌ただしく、長いズボン下が見つからず、普段のズボンだけなので、余計に堪えた。地鎮祭は神主さんが懇切丁寧にとりしきっている。ということはとても長く感じられた。4番目位に順番が回ってきた。がたがた震えながら、なんとか祭壇の前で手を合わせて、終えた。その後も神主さんは無事に上長部CCが建つようにいろんな神様に祈りを挙げ、45分ほどでやっと終わった。その後の行事は幸いな事に公民館の予定敷地から50メートルほど離れたところに建てられた製材所の中で行われた。風が遮られていたのと大きなストーブに薪がくべられていて、暖をとることができて少しずつ人心地がしてきた。まず地元代表の方の挨拶、次にベルリン独日協会の副理事長の竹谷さん、建築家のグーチャー氏、それに「絆・ベルリン」を代表し、僕が挨拶、さらにドイツ大使館の来られなかったアイルリッチ氏の挨拶文を「絆・ベルリン」の副団長のフランクが代読し、それをさらに山田より子さんが日本語に通訳した。グーチャーにより子さんの通訳をと勧めたら、けっこうと断られた。彼の簡単な日本語の挨拶は感情がこもっていたので、とてもよかった。それに比べて挨拶が苦手で、今回はまったく準備して来なかった自分のはよくなかったなとちょっと反省する。その後、竹谷さんがドイツ銀行発行の660万円の小切手を「遠野まごころネット」の多田理事長に渡す。その後は地元の猿楽の方が笛を吹き、太鼓を叩き、古くから伝わっている田楽の舞を踊る。めでたい舞が終わると豚汁が振る舞われた。アツアツの豚汁がどんなにおいしかったか、そして体を内側から暖めてくれたか。さらにたこ焼きが供された。それらに舌鼓を打ちながら、地元の方と話をした。夕方の7時頃に上長部をバスで出発し、新幹線で

仙台に帰る竹谷さんご夫妻を一関駅まで送った。我々はその後「遠野まごころネット」に9時過ぎに戻り、10時までの消灯時間に間に合った。

4月5日(木)

6時前に目が覚めた。前の晩に隣りに寝ていた少年が寝袋からはみ出て、毛布一枚で寝ていたのには驚いた。近くに寝ていたお父さんに話しかけると、この子は暑がり屋で、本当に薄着で平気なんですよと言っていた。6時頃からみんなが起き出してきた。「絆・ベルリン」グループのメンバーも集まり、朝食をとった。7時に朝のラジオ体操と朝礼があったので、我々はボランティア活動には参加しなかったが、いっしょに体操をして、荒川さんの挨拶を聞いた。

ボランティアの人たちがバスでそれぞれの活動地に出発した後、我々はトランクやリュックサックや寝袋を片づけて、タクシーを呼び、遠野駅に行った。10時のバスに乗り、大船渡へ向かった。寒かったが、日が照っていたので、気分は良かった。メンバーも意気軒昂と言ってもよかった。やはり「遠野まごころネット」の劣悪な条件の下で泊まった共通体験がメンバー間の連帯感を高めたようだ。昼前に大船渡のスーパーマーケット「???'」前に到着する。3台のタクシーに乗って今年のボランティア活動の際にも宿泊した「福祉の里センター」に赴く。今回はボランティアの人は無料で泊まれたが、今回は有料だった。有料と言っても、宿泊と朝と夕飯がついて3000円弱しかかからないから、とても安い。一部屋4人割にして3部屋に別れる。一部屋だけが洋室で4つのベットがあるのは、嫌われて、ぼくと年長のヨルクと若いガブリエルとジュンが入った。女性は4人だったので問題なかった。部屋に荷物を入れた後、センター内で到着時に買ってきたお弁当を食べた。それから、歩いて町の中心街に行き、大津波の爪痕を見学した。12人のうち9人は初めてだったので、やはりショックを受けていた。大船渡市を一望の下に見渡せる?? 神社までたくさんの階段を上った。そのあと被災地の一面に建てられた仮設商店街を訪ね、86歳のお母さんとその娘さんがやっている喫茶店でコーヒーを飲んだ。お母さんがとても元気なので、コーヒーが余計に美味しく感じられた。

午後4時に大船渡市長の戸田公明氏訪問の約束があるので、タクシーで市役所に向かう。我々の世話役の今野さんがすでに待っていた。戸田市長は一生活福祉部長橋本氏を伴って現れた。我々の訪問を喜び、前回同様英語で大船渡市の復興状況を懇切丁寧に説明してくれた。一応ガレキ処理などは終了し、これから町の再建設に入るが、住宅地の建設予定地がまだ決まらず、苦労しているとの事だった。つまり、土地持ちの人にその土地を放棄して、高台には住めと命令は出せないし、個人財産なのだから、海のそばに家を建てても禁止はできない。国からの助成金が出ないぞと言って説得するしかない。復興資金は全額国から出ている。大船渡市全体100ものプロジェクトがあり、それらの調整が大変だ。さらに市長が喜んでいることとして、大船渡市が全国12の年の「環境未来都市」に選ばれたと、野田首相からの承認書を高々と掲げてみせてくれた。将来環境にやさしい産業を興し、また再生可能エネルギーを使って、緑の都市を造って行くビジョンなのだそうだ。そして、それに対して多少の奨励金が出るそうだ。

質問の時間が短かったのと市役所発行の大震災報告書の中に外国からのボランティア活動欄があったが、去年9月の「絆・ベルリン」の活動が記されていないのが残念だった。市長にはその旨伝えた。

夕方「福祉の里センター」に戻り、お風呂に入った。銭湯あるいは温泉とも比べても遜色ない、大きくて、ゆったりとした湯槽があり、リラックスできる評判のお風呂だ。湯上がり後ビールを飲んで、食事をして、気分上々だった。全員が。食事はお変わり自由で量もたっぷりあり、味も悪くなかった。ので、満足した。

4月6日(金)

朝ご飯を7時に食べた。納豆つきの純日本式の食事だった。早速初来日のアクセルとルッツに納豆を食べさせた。おいしいとは思わないと言っていたが、問題なく食べていた。他のドイツ人が敬遠したので、日本人の村瀬さんとぼくのところに納豆が集中したが、何個も食べられる訳でもない。ので、二つ以上は辞退した。

8時のバスに乗って、集合地点のボランティア・センターまで行った。大分寒い。作業別に4つのグループに分かれた。ぼくはヨハンナと長洞仮設住宅に属する「ゆうゆうファーム」という子供の遊び場作りに回された。ほかは去年同様に越喜来湾の側溝掃除、次に「さんさんの会」という老人施設へのケータリングをする建物の水道と下水工事だった。車で連れて行ってもらったところは「福祉の里センター」の近くだった。仮設住宅が建てられているところは、学校のグラウンドとかとにかく公共の広場が普通だ。長洞仮設住宅の本来の土地は市のグラウンドの予定地だったそうだ。敷地一杯に建てられていて、子供の遊び場は、笹がたくさん茂っている山の始まる地帯だった。笹を鎌などで取り除く作業を、仮設住宅の人たち、さらに子供の遊び相手となってケアをしているChild FundというNPOの男女二人と一緒にした。女性の合澤さんは米国留学の経験もあり、流暢な英語でヨハンナと話をしていた。ぼくは作業中に住宅にお住まいの齋藤さんと話をし、いくつかの貴重な情報を得ることができた。昼ご飯は、まず昨日の夕方買っておいたパンと住宅地の中に売りにきた移動スーパーで買ったものを住宅の集会所で食べた。一緒にボランティア活動をした3人の方も一緒だった。名古屋のカソリック教会からいらしたとのこと。齋藤さんが自治会の会長—ここでは公民館の館長というのだそうだが—であることが分かったと、積極的に話しかけ、「絆・ベルリン」を紹介して、できたら、住民の皆さんの話を聞くための機会をつくっていただけるとお願いした。大船渡のボランティア・センターは週末は活動し、月曜と火曜は代休なので、そのどちらかの日に「絆・ベルリン」のメンバーが訪問する事を了承してくれた。

遊び場の笹取りは昼までに終わったので、午後は隣りにある開墾された家庭菜園の畑の石拾いをした。大きな石、小さな石、さらに草の根っこが畑の中に転がっていたので、拾って、一カ所に集めた。男の子が3人遊んでいて、時々我々と一緒に作業をしてくれたかと思うと、3人で竹の棒を持ってチャンバラ遊びをしていた。話しかけたが、ぶっきらぼうな答えしか返って来なくて、長くは続かなかった。ヨハンナが英語で話しかけたが、はかばかしくなかった。

作業終了後、齋藤さんと再会を約束して、別れた。齋藤さんは数年前まで「玉子菓子」メーカーとして東北で有名な「齋藤製菓」の副社長をしていたそうだ。

4月7日(土)

今日はボランティア・センターで3つの作業が割り当てられた。越喜来の側溝掃除と「さんさんの会」の家の裏の竹林を通す水道管工事、それと市内の津波の被害に遭った料理店内の掃除だった。ぼくはマレーシアの寄付金で建てられている「さんさんの会」の建物の水道管敷き設の作業に参加した。水道管を竹林の中を通すので、まず竹の根っこを取り出すのが一苦勞だった。地震のときは竹林に逃げ込めば、安全だと聞かされて来たが、これだけ根っこが張り巡らせ、縦横に絡み合っていれば、さもありなんと思われた。「絆・ベルリン」メンバーの中で力持ちのルッツの活躍は素晴らしく、2メートル近い彼がピックルを振り下ろすと、大抵の竹の根っこは引きはがれた。力を込めて、なにかをぶっ飛ばす事をルッツする(lutzen)という動詞まで作って、「みんなでルッツして」と彼を呼ぶようになってしまったほどだ。このように力を合わせて何とか午前中の作業を終えた。仲間にドイツ人と日本人の混血の娘さんと日本人の母親が参加していて、我々がドイツから来たことが分かって喜んでいて。まさか大船渡のボランティア活動でドイツ人グループと遭遇するとは思ってなかったのだろう。昼に持参した昼の弁当を食べようとすると、この「さんさんの会」の人たちがケータリングよろしく大きな豚汁とスパゲッティーを作って持って来てくれた。寒さの中暖かい料理の振る舞いを喜んで受けた。午後は道具を近くの川の水で洗ったりして過ごし、早々に引き上げることができた。ちょうどその頃市川から車で鶴さんと村松さん、廣瀬さんが福祉の里センターに到着したとのうれしい連絡が携帯に入った。帰りはスーパーに行って、今晚今野さんのお宅に夕食に招待されているので、何かおみやげはないかと捜しに行ったら、ちょうど花屋さんに立派な蘭の鉢があったので、さっそく購入した。

昨年も招待されたが、今野家のテーブルには今回も素晴らしい料理がずらりと並んでいた。今回はベルリン組12人、市川組人、前回フランクの怪我の時大変助けてもらった看護婦の鈴木裕子さん、お隣の佐藤さんご夫婦、今野さんご夫妻の20人もの大晩餐会だった。和食と洋食、飲み物もビールから日本酒、もちろんウーロン茶も。食べた、食べた、若者たちの食欲は見事だった。一応食欲が収まった頃から話の輪がいくつかできて、楽しい夕べを過ごすことができた。

4月8日(日)

日曜日だが、ボランティア・センターは休みではない。週末の休みを利用してボランティア活動に駆けつけ、参加する人が多いからだ。大船渡港に隣接するサン・アンドロス広場公園の掃除が割り当てられた。30人近いボランティアが参加した。津波がもろに襲ってきたらしく、桜の木が途中から避けていた。公園内にはいろんなものが落ちていた。大きなものはすでに片づけられていたが、こぶし大から小豆ほどの石、さらにガラスの破片が落ちていて、子供が遊べる状態ではなかった。大きな公園だったが、午後の2時頃までには作業が終わった。吹きさらしの平地だったので、寒くて閉口した。ちなみに、サン・アンドロスの名前の由来だが、江戸時代1611年スペインの使節とし

て来日したセバスチャン・ビスカイノが伊達政宗の許可を得て、聖アンドレスの祭日に大船渡港へ入港したことを記念してこの名がついた。

夕食の後ロビーに集まり、ミーティングをする。これまでの体験した事の印象を話してもらおう。これまで寒くて、また新人の5人は合宿生活に投げ込まれた訳だが、いい体験をしたとの報告。

4月9日(月)

ドイツ人メンバーから寄せられた納豆攻勢の朝ご飯を済ませてから、ゆっくりとロビーで新聞を読んだ。今日はボランティア・センターは休みだ。その代わりに長洞仮設住宅団地を訪れる事になっていた。センターを9時半頃出発し、団地まで歩いていった。集会場を兼ねている公民館一但し名前だけで、単なる集会所一に着くと、齋藤さんとほかの役員の方が6人ほど集まっていた。齋藤さんが唯一の男性だった。まず齋藤さんの挨拶があった。この団地の問題点が懇切丁寧一やや間延びした一に紹介された。その後質問に入り、女性の役員の方からの答えで具体的な問題点が浮き彫りにされた。長洞仮設住宅団地は308世帯が住んでいて、大船渡市の最大の団地なのだそうだ。そして、他の団地ではある区域ごとの住民がまとめて入居したのに対して、ここは何度かの抽選に漏れた人が多く、悪い意味での寄せ集め団地なのだそうだ。そのため、住民間の意志の疎通が悪く、例えば何名の子供が住んでいるのかも網羅されていない。戸別訪問して調べようとしても、協力的でない人もいる上に、市の方から情報を得ようとしても、個人情報保持の問題があって、できないとのこと。この会合に同席した支援事業の地区マネージャーの古沢さんに聞いても、あまりはかばかしい答えは聞けなかった。去年の10月から入居し始め、なんとかいくつかの趣味同好会などがスタートし、多少でも仮設団地としてのコミュニケーションが進み始めたそうだ。住宅の内部を見せてほしいとの要望が出ると、3人の方からどうぞ、何も隠すものもないと言って、了承してくれた。女性の役員の方が頑張っている印象を受ける。

まずは齋藤さんの住宅にお邪魔する。奥様と愛犬との3人？暮らしだった。4畳半二間と台所と風呂場の住宅だった。我々の感覚からすれば、狭いと言えたが、その前に体育館内での共同生活、あるいは親類の家なので、肩身の狭い思いをしてきた事を思えば、贅沢は言っていられないといわれた。奥様が民謡歌手として全国大会でも優勝したことがあると聞いて、ぜひ1曲をと懇願したら、では、東北の民謡をと歌ってくれた。感動が脳天を突き抜けるほど何と素晴らしいのだ。何人かの「絆・ベルリン」のメンバーの顔に涙が見えたと思ったが、空見ではなかっただろう。その後、ではドイツ側もとなり、メンバーの木下ジュン君がドイツのリートを歌った。音楽家志望のジュン君の歌も素晴らしく、感動の波が我々を突き抜けていく。心が一緒になった感じだ。次は役員の金野さんの家だ。金曜日の「ゆうゆうファーム」の作業の時に、手伝ってくれた一人の男の子が金野さんのお孫さんだった。金野さんのご主人が食事をしている最中に飛び込んでしまい、申し訳なかった。メンバーの何人かは住居の中、つまりプライバシー、を覗くのを拒否した。最後に安城さんの住居を訪ねた。91歳のお母様との二人暮らしだった。このお母様が素晴らしくお元気で、我々が行くと大変喜んでくれた。そして、ドイツ語で「ダンケ・シェーン」と挨拶してくれた。車いすの生活だが、

我々が別れる時には、わざわざ家の出口まで出ていらして、一人一人と握手までしてくれた。かえって生きる元気を分けてもらった気がした。

最後に団地の裏側にある「ゆうゆうファーム」を見学して、団地を去った。みなさんが出口まで見送りにきて下さった。独断だったが、今日お話した方々を翌日のお別れ会に招待した。

福祉の里センターに戻り、昼ご飯を食べた。午後はレンタカーを借りて、鶴さんの車と合わせて2台で大槌町に向かった。10人乗りのレンタカーは鶴さんが、鶴さんの車は村松が運転した。途中釜石を通った。瓦礫の山は去年よりずっと減っていた。大槌町に到着し、約束のスーパーマーケットの駐車場で「遠野まごころネット」の及川さん一行と落ち合った。大槌町も津波によって壊滅的な被害を受けていた。瓦礫を既になく、家の土台が見える大きな平地が目の前に広がっていた。左側に報道写真で見た事のある焼け落ちたスーパーマーケットの残骸が見えた。「遠野まごころネット」のコンテナでできた集会場に案内された。25平米ほどの部屋に台所とトイレがついている。今回の第一の目的は上長部の公民館の設計図について建築家のグーチョーと施行主の「遠野まごころネット」との具体的な打ち合わせだった。グーチョーと及川さん、さらに現場主任をやる末田さん、通訳のピーター、それにぼくが全体を見るというか、何か難問が出たときのためにそばに控えていた。鶴さんが昔取った杵柄で、さらに見守っていた。残りのメンバーは、大槌町で被災者の皆さん相手にメンタルケアをしているNPO「まごころ広場」の理事長の臼澤さんの話を聞いた。臼澤さんは、大津波によって家が流されると、屋根にかじりつき、漂流した。例の焼け落ちたスーパーマーケットの近くまで流されて、火の中に流されそうになり、これで最後かと思ったら、漂流物が流れてきたので、それに飛び移った。津波の引きが始まり、このままでは海に流されてしまうかと思ったら、岸の上ではしごを持った消防団員がはしごを差し出してきて、九死に一生を得たのだそうだ。臼澤さんはパワーポイントを使いながら、これらの話を詳しく話してくれた。自分は語り部として生きるのだと決意を語ってくれた。津波に遭って、生きる意味を見いだしたのだから、パラドックスだが津波様々だとも。全員がこの話に打たれたように聞いていた。日本語がわからないのが4人、さらにある程度分かるのが3人いるが、より子さんが同時通訳してくれた。今回はより子さんのおかげでとても助かっている。

4時半を過ぎたのでフランク、ヨルクとぼく、さらに運転をしてくれる村松以外は帰路についた。ボッシュ財団が寄付してくれるかもしれない大槌町の公民館の敷地予定地を見に行く。最初のは今回の集会場のある広場だ。次に山に向かって走り、2キロほど内陸に入ったところにあった。広さは十分だったが、午後の早い時間から陰になってしまう事、さらに町から昇り坂になっていて、自転車などでは来辛いのではということで余り感心できなかった。第三の候補地は海沿いに山を越えた湾で、吉里吉里と言う地域だった。井上ひさしさんの『吉里吉里国』はここに由来していると聞いて、いっぺんに親近感を抱いてしまった。連れて行かれた場所は湾を見下ろす高台になっていて、テント小屋が建っていた。入り口には「吉里吉里国」と書いてあった。NPO「吉里吉里国」の理事長羽賀正彦氏が出迎えてくれた。例の小説の中からそのまま抜け出てきたような雰囲気漂わせた人物だった。高台からの眺望は素晴らしく、ここが気に入ってしまった。同行したヨルクもフランクも



同じようにここにしようと言った。湾にはイルカも時々顔を出すそうだ。昔はクジラも来たんですがねと羽賀さんが付け加えた。一つ問題があった。ここは大津波に襲われ、高台に遭った建物が流されてしまったのだ。高台は標高11メートルで、3・11の津波は15メートルあったそうだ。根本問題が再燃した。500年に一度の大津波に耐えられる、あるいは襲来しない場所に家を建てるのが適切なのかという問題だ。そのような土地はこれまでの町があった場所にはあまりない。では高い、つまり15メートルもの防潮堤を建てるのかというと、壁に囲まれた海の見えない町になってしまう。第4の候補地が山の中にあると言われたが、大分遅くなっていたし、ものすごい風が吹いていたのと、この湾を見下ろす高台が余りにも気に入ってしまったので、もういいよと行かなかった。

後日談になるが、5月末現在で、ボッシュ財団が2000万円の寄付を申し出ている。それに、我々が見に行かなかった第4の候補地に建てられることがほぼ決まった。今になって行っておけばよかったと後悔している。

福祉の里センターに7時頃に戻り、みんなとの夕飯に間に合った。食後ロビーでミーティングをした。臼澤さんの話はメンバーに深い印象を与えたようで、その話で持ちきりだった。

4月10日(火)

大船渡滞在の最後の日になった。出発前に及川さん、臼澤さんに電話して、今晚のお別れ会に招待した。より子さんと二人で今晚のパーティーの食べ物を注文した。十分な量を確保できたかなと心配しながら。

二手に分かれた。フランクとぼくは立根町公民館、ロータリークラブ、大船渡高校を訪問し、残りは畑の石などを集めるボランティア活動に行った。今野さんが車で迎えにきてくれた。今野さんと奥さんがいらっしゃらなかったら、大船渡市での活動はこれほどうまくは行かなかっただろう。手回しよく今野さんが手配してくれた東海日報記者の三浦住恵さんが公民館の前で待っていた。去年はここで町民の皆さんおよび首都大学のグループと歌を披露し合い、詩の朗読を聞き、お酒を酌み交わし、またおいしい食事をご馳走になった。もちろん話が弾んだことはいまでもない。去年もお会いした今野龍雄館長から話を聞いた。おもしろいことに大船渡では自治会の会長を公民館館長という。公民館は市民の交流を進めるために活動し、集会場として使われる。住民の間で問題が出てくれば、公民館内で話し合い、館長が市役所に持ち込む。それとボランティア活動の拠点としても使われるそうだ。

次の訪問先はロータリークラブだが、時間が余ったので公民館の向かい側にある今野さんのご親戚の家を訪問する。フランクの指の怪我の話はここでも有名で、辞退してもたくさんの果物や飲み物が歓迎の印に供される。

11時に大船渡西ロータリークラブに行く。会長、副会長、さらに前年度の会長、副会長の4人の方が相手して下さる。我々は昨年から大船渡の高校生をベルリンに招待したく、企画を練っているが、学校側ではさまざまな障害があり、協力できないから、我々だけでやってほしいとの答が来ている。

我々としてはやはりある団体と協力し合いながら実現したいので、ロータリークラブの協力の可能性を打診しにきたと自己紹介する。会長の金氏の答は、趣旨はよく分かるが協力できないだろうとの事。今回の大災害でロータリーメンバーの多くの方が被害を受けて、例会に半分も出席して来ない現状なのだ。できれば他のロータリークラブ—例えば東京のとこ—が協力してくれるならできるかもしれないとの答だった。ベルリンや東京で打診してみますと引き下がった。

その後3人でボランティア・センターの近くにあるラーメン屋に行った。今野さんにごちそうして頂いた。午後の最初のアポは市役所だった。生活福祉部地域福祉課の三上課長補佐と山岸健悦郎係長と会い、ドイツから支援できる適当なプロジェクトがあるかどうか話してもらった。学校児童の放課後の集会場建設のプロジェクトが1000万円ぐらいで建てられるので、どうかと言われた。具体的な内容を連絡してもらうことを願います。それと市長から聞いた環境未来都市についてもっと説明をお願いしたが、まだ決まったばかりで具体的な内容はないと事だった。

昨年2度も訪問した大船渡高校を訪れる。校長は新任の夏井敬雄先生だった。昨年お会いし、我々の申し出に協力できないというメールを書かれた伊藤正則先生もいらした。お二人の意見は、やはりいい話だが、学校としては主体的に取り組めない、ロータリークラブなどとの共催でやってもらうと安心して生徒を送り出せるのでその方向で検討してほしいとのことだった。

福祉の里センターに戻り、お別れ会の準備をする。鶴さんとスーパーマーケットでビールやお酒、ジュース、ミネラルウォーターなどを買ってくる。「絆・ベルリン」のメンバーが12人、市川サポーター2人、長洞仮設住宅団地から齋藤さん、金野さんと例のお孫さん、安城さんの4人、Child Fundの合澤さん、「遠野まごころネット」の及川さん、末田さん、ピーター、大槌町から白澤さん、今野さんご夫妻、佐藤さんご夫妻、市役所の山岸さん、30名ほどだ。食べ物、飲み物が足りるだろうか心配する。佐藤ご夫妻の娘さんが来られないという。さらに看護婦の鈴木裕子さんが会に出られないのでとお別れの挨拶に来る。6時過ぎ頃からみなさんがだんだん集まってくる。手ぶらで来る人はいない。何か食べ物、飲み物を持参してくる。6時半過ぎに開会の挨拶をする。オードブルやお寿司、それからみなさんが持って来られたおでんなどをつまみながら、ビールやワインを飲み、話が少しずつ弾んでくる。みなさん、場所を移動し始めて、いい意味で座が乱れてくる。8時過ぎたところで、テーブルを見回すと、食べ物は半分も減っていない。センター側との約束では9時に終了すると言っているが、9時になっても誰も帰らない。そろそろお開きにしないと文句を言われると断って、最後の挨拶をする。何人かの方が挨拶をしたいと言うので、及川さんにまず願います。彼が「遠野まごころネット」で活動している理由を話してくれる。友人や親戚の方を亡くし、彼らの身代わりとなって復興活動に身を呈する覚悟であるとの話。すると次々に発言したいとなり、こうなったら仕方がない、センターから叱られる覚悟で約束時間を無視しようと腹をくる。金野さんと安城さんの話には及川さん以上に心を打たれた。震災で身内と家を失って以来、みなさんと話し合い、今晚ほどうれしかったことはなかった、これからも生きていていいことがあるかもしれないと思い、元気を出して生きて行くとおっしゃってくれた。

会場を全員で片づけて、10時には玄関前でみなさんとお別れをした。食べ物と飲み物は大余りに余ったが、車で来られた及川さん一向に全て持って行ってもらった。その後「絆」メンバーで女性軍の部屋に集まり、最後のミーティングをした。一人一人発言し、今回のボランティア活動に参加できて本当によかった。これほど充実した10日間を過ごせて幸せだとの発言が続いた。夜中過ぎに何とか寝床に入った。

今回のボランティア活動はメンバーの気が合ったせい、それと共同生活の心得を知っているメンバーがほとんどだったせい、毎日が非常に気持ちよく過ごせた。それと被災地の皆さんと感動的な出会いが何度もあり、深く心に残るボランティア活動になった。

4月11日(水)

朝の5時半頃から順次にそれぞれの目的地に向かってセンターを出発する。亜未とガブリエルは盛岡に、ブローゼ夫妻は青森に、ヨルクとアクセル、ルッツとジュンが仙台にと。朝ご飯に残ったのは5人だけだった。廣瀬さんと鶴さんの3人で彼の車で8時過ぎに福祉の里センターを出発し、まずは陸前高田市に向かった。二人が4月4日に地鎮祭が行われた上長部CC予定地を見たいと言うので。津波に完膚なきまでに破壊された陸前高田市を通り抜け、例の一本松が立っている市の反対側に出た。写真を撮るために車を止めて、降りる。上長部を捜し、人に聞いたりするが、なかなか見つからない。左側約300メートルに海が見える道を走っていると、反対側の道路そばにある家の庭でお年寄りが火を燃やしていたので、車を降りて聞きに行った。当然のごとく話は津波の話になった。本来の家は海側にあり、津波で壊されてしまったとの事。津波が来たときは取る物も取り敢えず、道の反対側にある公民館に逃げ込んだ。着の身着のまま逃げたので、屋内の普段着しか着ていなかったのが、寒くて困ったようだ。電気も無く、真っ暗な中で凍えていたようだ。食べるものはそれほど問題なかったとのこと。この庭は農作業の道具を入れる小屋だったので息子さん少し手を入れて、薪ストーブも使えるようにして、仮設住宅が建てられるまで住んでいたのだそうだ。時々津波で死んでいた方がよかったと思う時もある。山腹に少し畑があるので、そこで農作業をしているときだけ、生きていてよかったと思う。去年の夏にスイカが採れて、ボランティア活動の若者たちに食べさせ、喜ばれたことがとてもうれしかった。お元気でいらしてください、夏に機会があったら、スイカを食べに来ますよと言って、別れた。その後すぐ上長部CC予定地が見つかった。隣の製剤所では機械の取り付けが始まっていた。おもしろかったのは、製材の機械がのこぎり以外はすべて木でできていた事だ。取り付けしていた高知の会社の人説明してくれたところによると、鉄を使っていないから気温の変化の影響が少なく、振動も少ない利点があるとの事だった。地鎮祭の時に司会をしていた「遠野まごころネット」の黒住さんが一緒に取り付け作業をしていた。昨年来の知り合いなので立ち話をした。九州からいらして、もう1年近く「遠野まごころネット」を手伝っているとの事だった。家族もいらして、時々帰るとの事。別れてから、多少の給料はまごころネットから出ているのだろうが、大変だなと話合った。「遠野まごころネット」で何人かにお会いした人たちは、たぶんボランティア活動に来て、余りにも深くコミットしすぎて、辞めるに辞められなくなったのだろうとの意見に達した。辞めると仲間に対して申し訳ないという気持ちになるのだ

ろう。

気仙沼に着いた。津波に破壊された町の中心に入っていくと、数百トンもあるかと思われる大きな船がどっかりと鎮座しているのが目についた。車から降りて、写真を撮りながら船を一回りした。後で聞いた話だが、この船を津波への警鐘として残そうという考えと津波を思い出すので嫌だと言う町の人がまだ議論しているとの事だった。港に近いところは新しい建物が建ちつつあったが、中心部は復興にはほど遠い有り様だった。

次にいくつかの小さな町を通った。リアス式海岸の特徴として、山並みが海岸に迫っているので大きな平地がなく、山と海岸の間にできた小さな町がたくさんある。それらがもろに津波を浴びて破壊されていた。南三陸町はそれらの中でも大きな町だが、中心に小高い丘があったので車で上がり、小さな公園で降りて、眼下の町を見下ろすと、すさまじい破壊の跡が生々しく目に入った。町は内陸に行くに従って狭くなっているためか、津波のエネルギーが衰えず、2キロ先の方まで建物が破壊されているのが見えた。

海岸近くを走っている国道のそばにラーメン屋があったので、休憩を兼ねて食べに入る。そこも津波の被害を受けていて、前には100メートルほど先の海辺にあったのだが、流されてつい最近この店を出したと女将さんが話してくれた。海藻のたっぷり入った磯ラーメンはおいしかった。

次の大きな町は石巻だ。前からひどい被害を受けた町として聞いていたが、大きな都市なので被害地域が見つからず、町中を車でぐるぐる回る羽目になった。やっと大きな川を越えた一画がすっぽりと抜けたようになってるのが見えた。津波の跡だ。橋を渡って川の反対側に行くと、大きな製紙会社などがすでに操業していた。だが、住宅街はほとんど破壊されたままだった。瓦礫を積んだダンプカーが走っていた。珍しく女性の運転手だった。

午後3時を過ぎたし、雨も降っているので朝からずっと運転をしている鶴さんを思って、そろそろ宿を捜すことにした。仙台に向かう途中の東松原の温泉にでも泊まろうかと走って行ったら、おどろいたことに温泉町が津波で壊され、営業停止になっていた。海辺の温泉がやっているはずがないよなど言いながら、何とかつなと3人であきれてしまった。仕方なく内陸の方で泊まるかと秋保温泉を目指して走ったが、仙台市を突っ切らなくてはならず、結局6時頃になってしまった。手頃な値段の宿が見つかるかなと心配しながら、捜してみると、幸いな事に3軒目で見つかった。3人で一部屋、それもベッドルームが別についていたので二人の狼が隣りで寝ていても、廣瀬さんは安心して眠れると喜ぶ。温泉の湯、食事もさっぱりしてよかった。

4月12日(木)

翌朝は福島を目指して出発した。避難区域には入れないのは分かっていたが、とりあえず行けるところまで行こうと、飯舘村に向かった。飯舘村の中を区切っている避難区域に来ると、機動隊、それも三重県の機動隊が道路を封鎖していて、先に行けないようになっていた。機動隊員に名前、住所、目的まで聞かれ、メモされた。封鎖地点のとなりには新築らしい公民館、それと幼稚園があ

ったが、人の雰囲気的全くないのが不思議と言おうか不気味と言おうか、放射能の怖さが感じられた。それから車の首を返し、飯館村の村役場に向かった。きれいな丘陵地帯を走っていると、道路沿いにできたばかりらしい公園兼休憩所があったので、車を止めた。飯館ロマンチック街道と名前が付けられていた。福島第一の方向に向かってなだらかな山々が果てしなく続いていて、ドイツの本場にも劣らない、素晴らしい眺望だった。この素晴らしい地域が放射能に汚染されているのかと思うと、何ともいえない奇妙な感じがした。動物や人間には害を及ぼすのに、植物には一見被害を与えないのだ。植物にもDNAがあって、そのDNAも壊されるはずなのに。

さらに走るといくつかの酪農家屋が目についた。車を降りて探索してみると、飼料が積み上げてあるが牛のいない空っぽの牛棟があった。まるで昨日まで牛がもうと鳴きながら食べていたのが目に浮かぶような気がした。母屋にも目を向けてみると、ガラス窓越しに見える屋内はきちんと片づけられていた。何軒か同じような空っぽの酪農家屋が道路沿いに見られた。村役場に行くと、隣りに飯館村パトロール隊の溜まり場があった。村人が避難してしまったが、家の中にはたくさんの財産その他が残してあるので、パトロールしているのであろう。村役場の正面には現在の放射能の線量を示す計器が立っていた。数値は0.078マイクロシーベルトと高くはなかった。となりに大きなオルゴールのような物が置かれて、ボタンを押すと子どもたちが吹き込んだ村歌が聞こえるようになっていた。日本の美しい村として2度も選ばれた飯館村を讃える、誇りと希望に満ちた歌詞だった。美しい村を住めなくした東電と政府への怒りと取るべきなのだろう。

その後今年の4月初めから避難区域が解除された川内村に向かう。村役場につくと「帰って来た川内村」と書かれた大きな横断幕が張られてあった。役場の中に入り、帰還者の数などを聞くと、まだ三分の一ぐらいだとの事。たしかに子供を持った親なら、将来を考えて、二の足どころか、三の足も、四の足も踏んでしまうだろう。すでに転校して、そちらになじんでしまった子供もいるだろうし。

故郷に戻りたいという気持ちはよく分かるが、放射能に汚染された地域に将来性はあるのかという問いかけに答えられないまま、さらに自分たちが何も出来ないという思いを抱いて帰路についた。

福沢啓臣